



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	SCT® (Systems-Centered Therapy / Training /Approach) の考え方とその実践の特徴 : 理論の記述と実際のグループの検討を通じて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	鴨澤, あかね
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14854号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85231
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Akane_Kamozawa_abstract.pdf, 論文内容の要旨



様式 8

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：鴨澤あかね

学位論文題名

SCT®（Systems-Centered Therapy / Training / Approach）

の考え方とその実践の特徴

— 理論の記述と実際のグループの検討を通じて —

本論文ではグループ・アプローチの手法、SCT（Systems-Centered Therapy/Training/ Approach）について、その根拠を構成している理論を記述すること、および実際のグループの検討を通じ、SCT の考え方と実践の特徴を示すことを目的に研究を行った。その背景には、心理力動を説明する理論的枠組みや根拠はどのように実証され、かつ専門領域外の人たちに対し、説得力をどの程度持っているのか、また心理力動を扱うことを基盤に臨床実践をするサイコセラピストの専門性はいかにして保証されるのか、という 2 つの問いがあった。SCT を取り上げた理由としては、これら 2 つの問いに対する何等かの示唆が得られる可能性があることや、SCT に関する研究は国内外で未だ十分とはいえない現状があったことである。

本論文は序章、第 1 章、第 2 章、第 3 章、終章で構成されている。第 1 章では SCT の成り立ちを示し、その後、SCT の根拠を構成している理論を記述し、SCT の考え方の特徴を提示すべく試みた。SCT の創始者である Agazarian は、TLHS（A theory of living human systems）を創始し、この理論に基づく手法として SCT を生み出した。この TLHS に基づいて、SCT が心理力動を扱い、心理的な変容、システムの成長を目的に、グループにアプローチを行う際に重視していることは大まかに 2 点ある。1 つは、グループのリーダーは、グループの発達段階を理解し、それに即した介入を SCT の手続きに従って行うこと。もう 1 つは、グループに何等かの規範ができあがる前に、心の探求作業を促進するグループの規範／環境をグループに設定することである。

第 2 章では、SCT の中核的手法である機能的サブグループ（FSG）と、グループ・サイコセラピーで広く用いられている心理力動的な手法を用いたグルー

プ (PsyG) を研究目的で形成して比較し、それらのグループの様相と効果について、グループの防衛的なコミュニケーションに注目して検討、考察を行った。その結果、PsyG のメンバーは FSG のメンバーに比べ、日常的に広く受け入れられている防衛的なコミュニケーションを、むしろ積極的に取り入れている面があることが確認された。機能的サブグループを用いると一般のグループで生じがちなスケープゴートなどの現象が生じにくくなり、心の探求作業が促進されるという点は、Bion (1961) の「ペア心性」や「作業心性」についてはその仮説が支持された。FSG のメンバーが PsyG のメンバーより心の探求作業が進んだと体験しているかどうかに関しては、統計的に有意な差はなかった。

第3章はがん体験者を対象に SCT を用いたグループ・サイコセラピーを実施して、その様相と効果について検討、考察を行った。検討に際しては、量的データの検討や、グループ・サイコセラピー実施後の参加者へのインタビューだけでなく、グループのプロセスそのものについても質的な研究手法を用いて検討を行った。そして SCT を用いたグループの様相と、感情の表出とそれがもたらす効果等、グループ・サイコセラピー一般にみられるような心理的な効果が、SCT を用いた場合どのように生じるのか、多面的・多角的に考察した。

検討に際しては、グループのメンバーが、話したいことを話したいように話す従来の一般的なグループの「語り」とは異なる SCT の「語り」を取りあげて論じた。本研究のグループメンバーは、慣れ親しんだ語りとは異なる SCT の語り方にそって語ることに苦勞しながらも、その苦勞を共有し、新しい方法を身に付けることに協力して挑戦、努力している様子が見受けられたが、そういった体験が、説明できない、つながっている感覚や居心地の良さという、グループ・サイコセラピー一般にみられるような心理的な効果を、本研究のメンバーに引き起こしていた、と推察することが可能であった。また、これらの良き体験が、従来一般的なグループで語られることの多い、がんの罹患体験をめぐる「その時、そこで」の体験をグループで語らなかったにもかかわらず生じていたことは、SCT の語りによって、Yalom の 11 の療法的因子でいえば、「グループの凝集性」と、それによる効果もたらされた一例が示された、といえる可能性があった。

「今、ここで」の体験を語る、という SCT の「語りの内容」の要素は、セミナーの最後まで、このルールに則ってメンバーが話すことは難しく、一部で確認されるにとどまった。とはいえ、一部、確認されたこの語り方が、深い感情の表出を促し、それが心理的な効果をもたらした可能性、それだけでなく、副作用ももたらした可能性があることを、本研究が一例として提示した。

終章では、本論文を総括し、SCT の考え方と実践の特徴をあらためて論じるとともに、SCT のセラピストが取る役割や姿勢についても考察した。SCT のセラピストは、グループのメンバーの関係性や相互交流のパターンを、TLHS の根拠に基づく SCT の視点でみている。もしクライアントが心の探求作業が滞るような状態になっている場合には、SCT の仮説に基づく手続きに従って、適宜介入していく。SCT のセラピストの、このようなクライアントとの関わりは、クライアントの中に問題点や病理を見つけ出し、それに対して何等かの介入をして変更を試みるためではなく、クライアントの心の探求作業を促進する環境をつくるのが目的である。これらを理論に基づく手法、SCT の手続きに従って実施し、その結果として SCT が想定している仮説を再現すること、もし再現

されない場合は仮説を修正すること、それが SCT のリーダーのとする役割や姿勢の特徴であり、同時に SCT の特徴でもある。その特徴を示す一例を、本論文の研究において示した、と考察した。

本論文の限界としては、1 つめ、実施したグループが、SCT を用いることによるグループ・サイコセラピーの効果を検証するには、時間もサンプル数も十分とはいえなかったこと、またすべてのグループを、論文の筆者が実施していたため、それに起因するバイアスがかかっていた可能性が排除できないことであった。2 つめは、1 つめとも関連し、今回、実施したグループは、どれも SCT の発達段階のモデルの初期の段階のグループであったことである。そのため、他の発達段階にあるグループの検討はしておらず、1 つめの限界を解消するためにも、さらなるグループを実施して検証を重ねることが今後の課題である。

最後に、本論文で最初に掲げた 2 つの問いに関しては、理論に基づく手法である SCT の手続きに従って、今回のリーダーがグループを実施し、グループ・サイコセラピー一般にみられるような心理的な効果、あるいは副作用や課題が表れる可能性を、一例として本論文が提示したと考えられた。すなわち、SCT の手続きに従ってリーダーがグループを実践し、それによって SCT が想定する仮説が実現可能であること、その一例を本研究が提示した、ということが可能であり、このことは、本論文の 2 つの問いに対する示唆を、一定程度、示したといえると考えられた。